阿波学会紀要　第55号(pp.213-219)　2009.7

美馬市美馬町の神社祭礼

民俗班（徳島民俗学会）

高橋　晋一*

要旨：美馬市美馬町の神社祭礼の特色は，以下のようなものである。1）当屋を中心とした祭祀組織が基本となっている，2）当屋宅の門口に「竹矢来」を立てる習慣がある，3）担ぐタイプの山車が主流である，4）よいやしょの屋根は太鼓屋台と同様の布団屋根である，5）香川県（讃岐）との文化交流の足跡を示す民俗がある，6）神輿の舟渡御（川渡御）の習俗が見られる。こうした地域性のある複数の文化要素が重なりあうことで，美馬町特有の祭礼のかたちが紡ぎ出されていると言える。

キーワード：祭礼，山車，当屋祭祀，竹矢来，文化交流

1．はじめに

本稿では，平成20年5月～11月にかけて行った美馬市美馬町の神社祭礼に関する悉皆調査（各神社の関係者からの聞き取り調査，および祭礼当日の観察調査）をもとに，同地域の神社祭礼の特色を指摘したい。

2．美馬町の神社祭礼の概要

美馬町の神社祭礼の概況を**表1**にまとめた。美馬町の祭礼は，昼過ぎに例大祭の神事を行い，神輿に御霊代（みたましろ）を奉遷，神輿の御旅所渡御（おたびしょとぎょ）（地域によってはその後氏子区域を巡幸）があり，それにお囃子を奏しながら山車（屋台・よいやしょ）が供奉するという形式が基本である。近年，過疎・高齢化・少子化の影響で山車の運行を休止するところが増えてきているが，天都賀佐比古（あまつかさひこ）神社・玉振（たまふり）神社・八幡神社（字宮東）・大宮神社の秋祭りでは現在も山車が出ている。地区によっては大名行列を模したお練り（奴（やっこ）練り）が出るところ（三頭（さんとう）神社，正部（しょうぶ）神社），獅子舞の奉納が行われるところ（猿坂の弁財天社）もある。春祭り・夏祭りは現在神事のみで，祭礼行事は秋祭りに集約されている[1)]。

大正～昭和戦前まで，天都賀佐比古神社（郡里里分），正部神社（郡里山分），三頭神社（重清山分），八幡神社（重清里分）の秋祭りは，近在まれに見る盛大なものだった[2)]。天都賀佐比古神社では喜来・中山路・宗重・川原町から屋台・よいやしょが繰り出し，数十に及ぶ練り物で神輿渡御の行列は豪華を極めた[3)]。正部神社の秋祭りでは，神輿渡御に加え入倉の練り奴によるお練り（毛槍行列），正部・切久保の屋台，清田の八乙女舞，坊僧の獅子舞が出た[4)]。三頭神社ではお練りに加え，猿坂の獅子舞が奉納された。八幡神社（字八幡）では氏子各地区から7台のよいやしょが参加，猿坂からは獅子舞，吉水からは多くの曳馬（えいば）が出た[5)]。

3．美馬町の神社祭礼の特色

紙幅の関係で，個々の神社祭礼の実態の紹介は別稿に譲ることとし[6)]，ここでは美馬町の神社祭礼に見られる特色を，県内他地域との比較を念頭に置きながら整理しておきたい。

＊　徳島大学総合科学部

表１　美馬市美馬町の神社祭礼一覧

No.	名称	所在地	旧地区	旧社格	春祭	夏祭	秋祭	山車	神輿渡御	芸能	備考
1	天都賀佐比古神社	美馬町轟32	旧郡里地区	村社	4/20		10/20	屋台1	あり		かつて喜来・中山路・宗重の屋台も集結
2	玉振神社	美馬町字宗重2	旧郡里地区	村社		7/18	10/18	屋台1、よいやしょ3	あり		よいやしょは乗り子が揃った年に出る
3	八幡神社	美馬町字宮東23	旧郡里地区	村社	4/15	7/15	10/15→10月第3日曜	屋台1、よいやしょ1	あり		よいやしょは乗り子が揃った年に出る
4	若宮神社	美馬町字土ヶ久保23	旧郡里地区	無格社		6/10（月見踊り－休止）	10/18	なし	あり		
5	八坂神社	美馬町字滝宮231	旧郡里地区	無格社			10/12	なし	あり		
6	大宮神社	美馬町字妙見106	旧郡里地区	村社		6/17	10/17→10月第4日曜	屋台1、よいやしょ2	あり		よいやしょは乗り子が揃った年に出る
7	正部神社	美馬町字正部21	旧郡里地区	村社	4/19八乙女舞、神楽（休止）		10/19	屋台1（休止）	あり	練り奴（入倉）、獅子舞（坊僧－休止）、八乙女舞（清田－休止）	
8	天神社	美馬町字岡97	旧郡里地区	無格社			10/25	なし	あり		
9	若宮神社	美馬町字坊僧158	旧郡里地区	無格社			10/17	なし	なし	獅子舞（休止）	
10	杉尾神社	美馬町字丸山183	旧郡里地区	無格社			10/18	なし	なし		
11	若宮神社	美馬町字西段201-2	旧郡里地区	無格社			10/21	なし	なし		
12	山神社	美馬町字池ノ浦163	旧郡里地区	無格社			10/21	なし	なし		
13	松尾神社	美馬町字梅ヶ久保21	旧郡里地区	無格社			10/21	なし	現在休止		
14	東龍王神社	美馬町字丈寄447	旧郡里地区	無格社			旧8/1	なし	なし		
15	水婆女神社	美馬町字入倉812	旧郡里地区	無格社			旧8/10	なし	なし		
16	八幡神社	美馬町字八幡15	旧重清地区	郷社	4/15	旧6/15	10/15	よいやしょ（かつて7台－休止）	あり	獅子舞（猿坂）（休止）	
17	倭大国魂神社	美馬町字東宮上3	旧重清地区	村社	4/15	旧6/15	10/16	なし	あり		
18	三頭神社	美馬町字三頭山10	旧重清地区	村社	旧3/16	旧7/26（月見祭－休止）	10/17→10/16	なし	あり	お練り（野田ノ井）、獅子舞（猿坂－休止）	旧10/22農具市（馬寄せ）
19	伊射奈美神社	美馬町字中島338	旧重清地区	村社	旧1/19	旧6/18→7/1（輪抜け）	10/19	屋台1（廃絶）、よいやしょ1（廃絶）	あり（かつて舟渡御）	獅子舞（廃絶）	
20	天津賀佐彦神社	美馬町字西荒川48-1	旧重清地区	無格社			10/19	なし	現在休止		
21	弁財天社	美馬町字猿坂85-3	旧重清地区	無格社			旧9/7→11月第1日曜	なし	あり	獅子舞	

１）当屋を中心とした祭祀組織が基本となっている。

各神社では，神社の恒常的な管理運営の責任者である「総代」を数名から十数名置いているが，それとは別に祭りの総責任者として，氏子の中から１年交替の輪番で当屋（とうや）（神輿当屋，本当屋とも言う）１戸を選出する。当屋の職務は氏子を代表して神に仕えることであり，祭りの準備から当日の行事（神事や神輿渡御への参列，飲食の接待など），後片付けに至るまで大きな役割を担う。字宮東の八幡神社では氏子区域が東西南北中の５地区に分かれており，５年に１度神輿当屋が回ってくる。神輿当屋に当たった地区の中で１戸が当屋を務める。

そのほか，屋台・よいやしょ（訛って「よやしょ」とも呼ばれる）・獅子舞・お供の馬（現在は馬の幟で代用）が出る地区では，それぞれの総責任者である「屋台当屋」「よいやしょ当屋」「獅子当屋」「馬当屋」が選出され，責務を果たす（現在はこれらの当屋を廃したところもある）。

美馬町では，戦前まで農耕馬が多く飼われており，氏子区域内のいくつかの「馬当屋組」からそれぞれその年の「馬当屋」１戸を選び，秋祭りに神輿のお供の馬を出していた。昭和30年代を最後に馬を飼っている家はなくなったが，その後もいくつかの地区では馬当屋のシステムは存続，現在は生きた馬の代わりに馬の絵を描いた幟を奉持して神輿渡御の列に加わっている（**写真１**）。

字轟の天都賀佐比古神社では，昭和30年代まで秋祭りに鞍などの飾り付けをした馬が出ていた。上（かみ）と下（しも）にそれぞれ馬当屋があって，馬を出した。馬がない家では，馬を借りてきて出した。現在，馬当屋は消滅している。

字宗重の玉振神社では，昭和10年頃まで秋祭りに馬13頭が出ており，終戦直後も２，３頭出ていた。

写真１　馬当屋の幟
（字正部・正部神社）

写真２　当屋の竹矢来
（字轟・天都賀佐比古神社）

東宗重に５組，中宗重に４組，西宗重に４組の馬当屋組があり，各組の馬当屋に当たった家が飾り立てた馬を出していた。馬がいない場合は，馬を借りて出した。現在，馬当屋は馬の絵を描いた幟（現在１本）を持って神輿渡御に従う形に変わっている。

山間部で馬のいない字正部の正部神社にも馬当屋があった。入倉の３地区（中・西・東）にそれぞれ馬当屋組があり，馬当屋に当たった家が平野部から馬を借りてきて出した。馬は昭和30年代まで出ていた。

特殊な事例として，猿坂弁財天社の祭りでは，神仏分離以前からの習慣で美馬町字願勝寺の願勝寺住職が来て神事（読経）を行っている。また，字八幡（旧重清地区）の八幡神社祭礼では，旧重清城城主の小笠原氏（現在小笠氏），家老の河野氏の子孫が金幣を奉持して神輿巡幸に参列している。

２）当屋宅の門口に「竹矢来（たけやらい）」を立てる習慣が見られる。

美馬町内のほとんどの神社では，秋祭りの前々日のショウジリ（精進入り）の日に，当屋の家の門口に長さ５～８メートルの青竹16～24本あまりを使って矢来を組む習慣が見られる。これを「竹矢来」と呼んでいる（**写真２**）。矢来の両側には，先端の葉を残したひときわ長い竹を１本ずつ立てる。矢来の内側には祭壇を設け，御幣・神社の社号を書いた掛軸・神饌（しんせん）などを供える。矢来の組み方（竹の本数・長さ・縛り方・飾り付け）や神饌の種類・数量・並べ方にはそれぞれの地域のしきたりがある。

字妙見の大宮神社では，ショウジリの日に神輿当屋・屋台当屋の家の軒先に竹矢来を立てる[7]。竹は24本を使うのが正式で，両端には先端の葉を残した長い竹を立てる。矢来の内側に祭壇を設け，神饌を飾る。矢来が組み上がると神職が来て拝む。矢来は祭りの翌日，神職に拝んでもらってから壊す。

字宗重の玉振神社では，先端を切った青竹10組20本と，先端に葉を残した青竹２本の計22本を使って竹矢来を立てる。矢来の内側には御幣と神饌を祀る。以前はよいやしょ当屋，馬当屋でも竹矢来を立てていた。矢来はショウジリの日に神職が来て拝む。

竹矢来の両側に，先端の葉を残した丈の長い青竹を立てる習慣は，民俗学的にきわめて意義の深いものである。これは，祭りに当たり神を迎える依代（よりしろ）（神が降臨する目印）としての機能を持つものと考えられ[8]，当屋での神祭りの古い形を残したものとして貴重である。竹矢来が組み上がると必ず神職が拝みにくるが，これは当屋宅に（竹矢来を通して）神霊を迎え祀る意味がある。なお，矢来本体は，神

を迎えるに当たり当屋宅を清浄に保つ役割を果たすと考えられる。

近畿から中四国・北陸地方にかけて，祭りの開始に当たり，当屋の門先に「オハケ」と呼ばれる神が宿る依代を設ける地域がある[9]。県内でも三好市東祖谷，阿南市吉井町，徳島市川内町，海部郡美波町西由岐などで祭りの開始にあたりオハケを立てる風が見られるが，いずれも丈の長い青竹の先端に数本の御幣を挿したものである。竹矢来の両端の葉を残した竹の形状はまさにオハケそのものであり，同様の機能を果たすものと考えられる。

ちなみに，当屋の竹矢来の分布は県内では旧美馬郡の平野部（旧美馬町・脇町・穴吹町・半田町・貞光町），および旧三好郡・麻植郡のごく一部に限られている。県外には同種の設えは見られず，徳島県特有の民俗として注目すべきである。

3）祭礼山車は，担ぐタイプの山車（屋台，よいやしょ）が主流となっている。

美馬町の祭礼に出る山車は，いずれも担ぐタイプの山車で，大型の「屋台」（5人乗り）と小型の「よいやしょ」（4人乗り）の2種類がある。県内でも県南・県西部は曳くタイプの山車（だんじり），県北の吉野川中～下流域は担ぐタイプの山車（屋台・よいやしょ）が優勢であるが[10]，美馬町は周辺の美馬市脇町・穴吹町，つるぎ町貞光などと同様，「屋台文化圏」に属していることがわかる。ただし美馬町の西隣の三好市三野町の山車はいずれもだんじり（曳くタイプの山車）となっており，美馬町は徳島県における屋台文化圏の最西端に位置していることがわかる。

屋台（**写真3**）には5人の乗り子（大太鼓1，小太鼓2，鉦2）が乗り込み，楽を奏する。以前は小学生男子のみであったが，近年は少子化のため女子も参加するようになっている。乗り子は伝統的には女物の着物を着てタスキがけをし，頭に烏帽子（えぼし）か鉢巻きを付け，顔に化粧をしていたが，現在は簡略化してハッピ姿のところもある。

よいやしょは，県内では大型で重い屋台の簡便型として，明治時代以降流行を見たとされる[11]。着物にタスキがけをし，鉢巻きをした幼稚園～小学校低学年の子供4人が乗り込み，中央に据えた鉄太鼓をボテボテと叩く。

写真3　屋台（字宮東・八幡神社）

写真4　よいやしょ（字八幡・八幡神社）
［写真提供＝二宮正経氏］

屋台・よいやしょは昭和30～40年代までは担いでいたが，近年は担ぎ手不足から，本体の下に台車を付けて曳く形に変わっている。

4）よいやしょの屋根が，太鼓屋台と同様の布団屋根になっている。

ここで注目したいのは，よいやしょの屋根の形態である。美馬町のよいやしょの屋根は木造の平屋根であるが，よく見ると3～5枚の薄い座布団を重ねたような形になっている。それぞれの座布団の色を丁寧に塗り分けているケースも見られる。とくに字八幡の八幡神社のよいやしょの屋根は，座布団を重ねた形が強調されている（**写真4**）。これは，形態から見ると，江戸時代中期に上方で誕生し，18世紀

後半～19世紀初めにかけて海上交通の発達とともに瀬戸内海沿岸など西日本各地に伝播，普及を見た太鼓屋台（太鼓台，ちょうさ）[12] のミニチュア版に他ならない。中央に鋲太鼓１を据え，その周りに４人の乗り子が座り，シンプルな囃子を入れる点も共通している。

太鼓屋台風の布団屋根を持つよいやしょの分布は，現在見る限りでは県内では旧美馬郡一帯に限られているようである。隣接する旧阿波郡では，よいやしょの屋根は屋台と同じ宮型（唐破風）である。さらに吉野川を下った徳島市や鳴門市では，布団飾りのない平屋根のものが多い。

なお徳島県内では，太鼓屋台（通常の大型のもの）の分布は三好市の県境山間地域，海部郡の沿岸地域にほぼ限局している。前者は隣接する愛媛県･香川県，後者は阪神圏から海を越えて流入したものと考えられる[13]。布団屋根の山車は，徳島県においては「外来文化」なのである。布団屋根のよいやしょの流入の時期と経路，普及過程についてはさらなる検討が必要であるが[14]，徳島県における山車の展開過程を理解する上で，よいやしょの屋根の形は重要な鍵を握っていると言える。

５）香川県（讃岐）との文化交流の足跡を示す民俗が見られる。

猿坂弁財天社の獅子舞（**写真５**）は，獅子１頭２名（古くは２頭だて），打ち子３名（太鼓２名，長刀（猩々（しょうじょう））１名），裏太鼓２名，獅子舞の由来の巻物を読む「由来読み」１名，鉦１名という構成で，現在，猩々の舞・扇の舞の二つの演目が伝承されている。江戸時代末に讃岐から獅子頭や道具を買い，舞い方や鳴り物については丸亀方面から指導者を招いて習得したと言われているが[15]，鳴り物の構成，演目に香川県の獅子舞特有の「猩々の舞」が入っていること，獅子舞の由来の巻物を読み上げること[16]，獅子の芸態などからみて，讃岐から伝播したことは疑いない。なお，猩々の舞が入る獅子舞は，管見の範囲では県下では美馬市脇町の広棚獅子舞と猿坂獅子舞のみであり，県境を越えた文化交流の跡を残すものとして文化財的価値が高いものと言える。

旧郡里村の山間に位置する三頭神社祭礼・正部神社祭礼では，神輿の御旅所渡御に伴い，大名行列を模したお練り（奴練り）が出る（**写真６**）。県境を越えた香川県側（旧琴南町）にも同様のお練りが見られ[17]，美馬町の平野部の祭礼では見られないことから，讃岐側との文化交流のなかで伝えられた可能性が高い。美馬町の山間部には香川県側と通じる４つの峠（相栗峠，寒風峠，三頭峠，二双峠）があるが，中でも三頭峠は阿讃の屈指の要路で，その利用範囲は西阿波・西讃岐全域に及び，金比羅詣り，借耕牛（かりこうし）を始め多くの人や物資が往来した[18]。こうした峠を介した文化交流が，獅子舞やお練りなどの文化要素の伝播をもたらしたと言える。

三頭神社のお練りは江戸末期に当地に伝わったと言われ[19]，野田ノ井の氏子が務める。構成は，提灯を持った采配１，タンポ２，子役（天狗１，長刀１），毛槍８（16人）と続く。正部神社のお練りは入倉の

写真５　獅子舞（字猿坂・弁財天社）

写真６　お練り（字三頭山・三頭神社）

氏子が務める。行列は裁料人，露祓（天狗），御額板，剣，鉾，鉄砲，大毛鎗２，大黒毛槍２，小黒毛槍１，茶臼鎗４，白毛鎗１の順。渡御行列の順序を記した「行列記」によれば，正部神社のお練りは明和６年（1769）に始まったとされる。練り奴は揃いの法被を着て前垂れを付け，毛槍を相手に投げ渡しなら前進するが，両地域のお練りの衣装やスタイルはよく似ている（野田ノ井と入倉の間は峠を挟み３kmあまりの近さである）。

６）神輿の舟渡御（川渡御）の習俗がかつて見られた。

字中鳥の伊射奈美神社は，氏子の多くが吉野川対岸のつるぎ町半田（旧美馬郡半田町）にあるため（氏子区域は半田字松生（西），半田字毛田（東），美馬町中鳥），昭和62年まで，秋祭りの際，神輿をカンドリ舟に載せて吉野川南岸の半田地区に渡り，氏子区域を巡幸していた（**写真７**）。

古くは中鳥と松生は地続きだったが，江戸時代中期に川の流路が変わり，分断された。行政的にはその後も中鳥・松生は同じ半田村に属していたが，昭和９年に中鳥が重清村（後に美馬町）に編入された結果，氏子が川を挟んだ２町（北岸の美馬町／南岸の半田町）にまたがる形となった。河川の流路変更による氏子区域の分断，さらには行政区分の変更という大きな変化がありながら，旧来の氏子区域による祭祀が継続しているケースは珍しい。さらに吉野川の対岸まで神輿が舟渡御するという事例は，他地域には見られず，特筆すべき事例と言える。

写真７　神輿の舟渡御（字中鳥・伊射奈美神社）
［写真提供＝和田幸夫氏］

４．おわりに

以上，美馬市美馬町の神社祭礼の特色を指摘してきた。祭祀組織（とくに馬当屋），当屋の竹矢来，祭礼山車の形態などには美馬町の祭礼の地域性がよく表れている[20]。こうした基層的要素の上に，山間部では香川県との峠を介した文化伝播（獅子舞，お練り），吉野川河道近くの中鳥（伊射奈美神社）では舟渡御の習俗というように，地理的環境に因む付帯的な文化要素も重なり，美馬町特有の祭礼の性格が形作られたものと言えるのである。

謝辞

今回の調査では多くの方にお世話になりました。とくにお世話になった方々のお名前を記して謝意を表します（五十音順，敬称略）。

逢坂和幸，逢坂幸一，岡山秀則，加藤勝義，高田磯市，都築晟，津田篁史，富永重治，長江吉幸，西岡　清，西前英和，二宮正経，濱田武志，藤島昭彦，藤原虎市，森本敏美，和田幸夫。

注

１）戦前まで，旧暦７月26日（二十六夜）の三頭神社の夏祭りには，「月見踊り」のために阿讃両地域の若者が押しかけた。

２）美馬町史編集委員会（1989）：939頁。

３）同上：942頁。

４）同上：950頁。

５）同上：953頁。

６）『徳島地域文化研究』８号（徳島地域文化研究会発行，2010年３月刊行予定）に詳報を掲載する予定である。

７）多くの地域では，竹矢来は神輿当屋の家のみに立てるが，地域によっては屋台当屋，よいやしょ当屋，馬当屋，獅子当屋の軒先にも組むことがある。しかし，竹矢来の本質を考えると，本来は祭りに当たり神霊を招き祀る神輿当屋宅にのみ立てるものであり，屋台当屋その他に立てるようになったのは，その本義が薄れてきた後の形と思われる。

８）高橋（2007）：８頁。

９）浦西（1999）：277頁。オハケは単に当屋の印のみでなく，カミの宿る標示物と考えられる。

10）高橋（2008）：223－225頁。

11）岡島（1986）：216頁。

12）大本（2005）：377頁。

13）香川県・愛媛県東部の山車は，太鼓屋台が大半を占めている。なお徳島県内では，美馬市脇町（落久保地区）にも飛び石的に太鼓屋台が１台見られ，脇人神社の秋祭りに出されている。

14）香川県もしくは愛媛県東部の太鼓屋台の影響，あるいは上

方から徳島城下に伝わった太鼓屋台のかたち（明治期の徳島市眉山町・春日神社祭礼の様子を描いた『春日神社祭礼絵巻』に，布団屋根のよいやしょが描かれている）が吉野川をさかのぼって伝わった可能性などが考えられる。

15）美馬町史編集委員会（1989）：1314頁。

16）溝渕（1999）：24－28頁。

17）琴南町誌編纂委員会（1986）：885－887頁。

18）美馬町史編集委員会（1989）：1113－1116頁。

19）同上：1315頁。

20）これらはさらに，旧美馬郡平野部の民俗の特色ととらえることもできる。

文献

浦西　勉（1999）：「オハケ」『日本民俗大辞典（上）』吉川弘文館，277－278頁.

大本敬久（2005）：「四国の祭礼山車―愛媛県を中心に」『都市の祭礼―山・鉾・屋台と囃子』岩田書院，365－389頁.

岡島隆夫（1986）：「ヨイヤショ」『阿波の民俗１　年中行事』徳島市立図書館，216－218頁.

郡里村史編集委員会編（1957）：『郡里村史』同委員会.

琴南町誌編纂委員会編（1986）：『琴南町誌』琴南町.

重清村編（1917）：『徳島県美馬郡重清村誌』重清村.

瀬戸内海歴史民俗資料館編（1998）：『香川県の民俗芸能』同館.

高橋晋一（2007）：「当家の竹矢来」『儀礼文化ニュース』157号，儀礼文化学会，８頁.

高橋晋一（2008）：「徳島県における祭礼山車の展開―文化交流史の視点から」『歴史に見る四国』雄山閣，217－240頁.

溝渕茂樹（1999）：「香川県の獅子舞概観」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』12号，同館，１－29頁.

美馬町史編集委員会編（1989）：『美馬町史』美馬町.